

国
労
冬
物
語

人らしく 生きよう

線路をうばわれた
鉄道員と家族の物語



「人らしく生きよう－国労冬物語」京大上映会

日時 10月16日 18:30～（18:00開場）100分

場所 京都大学文学部新館第一講義室

*入場無料！だけど上映後にカンパ袋をまわします。

「人間として 労働者として

恥ずかしくない生きかたをしたい」

一 一九八七年、国鉄は分割民営化され、JRとなった。このとき国鉄の職員は選別され、特定の人々が新会社に不採用とされた。

それは中曽根政権の下で進められた労働運動潰しに他ならなかった。総評労働運動の中核、国労。その国労に所属する労働者が集中的に不採用とされたのだった。

不採用となった人々は国鉄清算事業団に移され、形ばかりの再就職の斡旋がなされた。そして、一九九〇年、採用差別に抗議してJRへの復帰を求め続けた一〇四七名が最終的に完全に解雇された。

この政府による採用差別から十五年、闘い続けている人びとがいる。国労に所属しているという理由でJRへの採用を拒否され、人間の尊厳を奪われた組合員とその家族は、アルバイトや物品販売などで生活費を工面しながら、不当解雇撤回・JR復帰を求める闘いを今なお続けている。ノンフィクション・ドキュメンタリー映画「人らしく生きよう 国労冬物語」に登場するのはそうした人びとである。

国鉄民営化のさいに政府が使ったやり口は、現在のリストラの原型となっている。経営側にとって目障りな組合のある会社はいったん潰し、その上で新しい会社を作って従順な労働者のみを採用するという方法が、いまや大企業から中小企業にいたるまで行われている。

現在の視点から明らかなことは日本における弱肉強食の新自由主義グローバルゼーションの原点を、この国鉄民営化に見出すことができるということであろう。公共部門の切り売り競争の導入。「労働力の弾力化」と称する労働者の身分の不安定化。今日、企業の生き残りという目的の前には、働く人びと一人一人の人生の重さはきわめて軽い。この大失業の時代に、我々はどうか生きていくのか。

「人らしく生きよう 国労冬物語」に登場する人々の姿は、しかし、いかにも人くさく、物事にはまっすぐだが、時には弱さも見せる。「特別な人々」では決してない。

自分をはげますことは難しくても
他人（ひと）を励ますことはできる

友よ 頭（こうべ）を上げようじゃないか
昂然と高張る胸に 風がりと鳴る
前を見つめて さあ 歩きはじめよう

右は作品中でも紹介される、国鉄分割民営化のさなか、「横浜人活事件」で不当逮捕されたある国労組合員が綴った詩の一節である。「不当なものには不当だ」と、激しい弾圧を前にしても、自分の信念を枉げることなく訴えつづけていく力の源泉を、この詩の中に見ることができる。

主催 ATTAC 京大グループ

連絡先 小森 075-706-3875 saisei@metabigbbe.ne.jp
山沖 090-4306-4063

協力 闘う闘争団を支援する京都の会

連絡先 小山 0774-33-4792

